

異世界に迷いこんで、一年間の旅をした。

その結果として得たものも失ったものもあるが、失ったもので代表的な一つが「言語」だ。

「おかげで日常会話には困らなくなってきましたよ」

窓を開けて部屋の掃除をしながら、雫は言う。

旅の最後に、言語が分からなくなってしまう雫は、一からそれを学ぶことになったのだが、一年もすると大分支障ないようになってきた。その間に、言葉の勘違いが原因で結婚したりもしているのだが、振り返れば大体結果的にはよかった、と思う。

同じく本棚の掃除をしているエリクが返す。

「論文もかなり読めるようになったしね。ああ、そういうえば、ファルサスから仕官の話が来てるけど、どうする？」

「えっ」
その話は初耳だ。現在雫は、異世界に来て最初に暮らした町ワノーブにおり、近所に住むシセアの手伝いや勉強をして暮らしているが、その前はファルサスの城に住みこんでいたのだ。

今でも厳密には彼女の所属はファルサス宮廷であり、ただ地方療養という形で処理されている。

一方エリクは非常勤ではあるが、ファルサス所属の宮廷魔法士のままだ。月に何度かは出仕して研究発表をしたり論文を提出したりしている。だからこそ、妻への再仕官の話が彼伝手で来たのだろう。

「王が、王太子の教育係をして欲しがってる。もちろん君一人じゃないけど、君は適任だろうって」

「ああ……確かに」

それはうぬぼれでなく、ただの事実だ。

一から子供に言語を教える、ということについて、雫が一番適任だろう。何故なら今のところ「一からこの世界の言語を学んだ大人」は彼女一人だけしかない。

それに、王太子のことは雫も気にかけているのだ。大事な主君の子供で、雫自身が取り上げた。今も月に一、二度は様子を見に行っている。

だからそれは、願ってもみない話だ。

「受けます。いいですか？」

「いいと思うよ。こっちの家はそのまま、時々戻ってくればいいと思う。本が多いし」

「本は増えるだけですもんね……減らない」

このままでいると、王太子が大きくなることにはこっちの家は完全に書庫になってしまいそうだ。ただ、城に住みこめば読む本にも本の置き場にも不自由はなくなる。その分、面倒事にも見舞われるだろうが……自分はその慣れている。慣れ過ぎていくくらいだ。王の嫌がらせを正面から受け止めて来た場数が違う。

エリクは本棚に本を戻しながら言った。

「君がその気なら、王と面談で契約書起こしだね。一応、僕も同席するよ」

「王様と直接対決は久しぶりですもんね。今から装備を整えます」

「そういうことにならないように僕も同席するよ」
何を心配されているかよく分からないが、何もかもを

心配されている気がする。ただ、あの手の輩は引き下がつたりスルーしたりしては、のさばらせるだけだ。正面から受けて立って、殴り返さないといけない。問題は殴り返す相手が雇用主だということだが、向こうも雫に従順さは求めているまいだろう。彼女は彼女の仕事を第一だ。

雫は窓の棧を拭いていた雑巾を、水桶に戻す。

「でも、またエリクと一緒の場所で働けるの楽しみです」

ファルサスで共に仕官していた時は、ほんの少しだけだった。あの時はお互いに一時雇用だったが、これからはもう少し長い将来を見越してのことになるだろう。

妻の言葉に、エリクは微笑む。

「そうだね。僕も君を家に残して出仕するよりは、楽しいかな」

「えっ、本当ですか……。それは私が何かしてないか見張れるから、ってことですか」

「どうしてそうなるの」

「いえ、エリクはあんまり日々の生活で喜怒哀楽を出さないの……よっぽどの面白みがあるんだろうなって」

「同じ場所で働く配偶者の行動に、よっぽどの面白みを見出している人間は変わってない？」

「そうかもしれませんね……」

ただ、雫自身がそこそこ変なことをしている自覚はあるので、面白がられても無理はない、と思う。

「まあ、君を見ているのは楽しいよ」

「やっぱりですか!？」

開けたままの窓から風が通り過ぎていく。その香りは、新しい時代の匂いがした。